

全科協 News

vol.55
NO.6

CONTENTS

- P2 特集
- P10 海外博物館事情
- P12 11月12月の特別展等
- P14 リニューアル情報
- P15 新規加盟館紹介
- P16 トピックス



表紙の写真の解説は、P16の「我が館の推しなモノ・コト」をご覧ください

特集 Special

読書のすすめ 2025

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

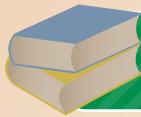
全国科学博物館協議会

〒110-8718

東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9171

<https://jcsm.jp/>



読書のすすめ 2025

出版不況といわれるようになって久しいが、児童書市場は拡大傾向にあり、とくに絵本の売り上げはコロナ禍による需要増が一段落した後も堅調に推移しているとされる（吉田, 2023）。その中でも「科学絵本」というジャンルに注目すると、絵本全体の伸びには及ばないものの、とくに動物や植物をテーマとした作品は大きく増加しているようである。科学系博物館利用者の低年齢化が進むなか、幼少期から科学にふれ、その興味・関心を持続させるツールとなる科学絵本の現状を把握することは、展示や普及・教育活動における未就学児童対応を進めるうえで大いに役立つであろう。そこで今号では、ほぼ10年ぶりの書評特集として、幅広い分野から8名の方々に「科学系博物館が取り扱う自然科学全般への興味・関心を高める絵本」計14冊を選定し、ご紹介いただいた。これらの中の絵本と書評が、みなさんの博物館活動に新たな視点をもたらす一助となることを願っている。

<引用文献>

吉田理栄子, 2023. 少子化なのに「絵本」市場は拡大の知られざる裏側
<https://toyokeizai.net/articles/-/674644> (2025年8月28日閲覧)

きしわだ自然資料館 学芸員（特命参事） 平田 慎一郎

川崎市青少年科学館（かわさき宙と緑の科学館） 天文担当係長 弘田 澄人

NPO法人大阪自然史センター職員 西澤 真樹子

『クジラがしんだら』

文：江口 紘理／絵：かわさき しゅんいち

監修：藤原 義弘／童心社 2024年



絵本をひらくと、そこは海。一頭のマッコウクジラが、静かに海の底に沈んでいく。様々な困難を乗り越えてきたことを示す、傷だらけの体。その皮膚ははがれ、すでに傷みはじめているようだ。左寄りに開いた鼻の穴からは、肺の中から水圧で押し出された空気が、ぷくぷくと螺旋のようにのぼっていく。

マッコウクジラは、大好物のダイオウイカを追いかけ、水深2000メートル以上も先の深海に潜ることができる。体の三割を占める大きな頭には、ワックス状の「脳油」がたっぷり納められている。潜る時には、鼻の穴から引き込んだ冷たい海水で脳油を冷やして固め、頭を下にして、まっすぐ、重りを落とすように潜水する。お腹がいっぱいになれば、血液を巡らせて脳油をあたため、比重を変えて水面に浮上する。でも、もう脳油は温まることもなく、水面に上がることもない。彼の命は終わったのだ。

横倒しになった体は、海の底に「ドウ」と辿り着くと、何年もこの日を待ちわびていた生きものたちの餌と、す

みかになる。静かで暗い海の中に落ちてきた巨大なごちそう。その匂いは、強烈な光のように生きものたちを引き寄せていく。肉の宴は半年も続き、次に、骨を分解する生きものたちの長い時代がはじまる。命のつながりの物語と、描き込まれた情報をひとつつ見つける図鑑的な読み方とも、どちらも楽しめる絵本。

個人的なことになるが、自然史博物館で標本製作に関わる私は、2023年・2024年の春、立て続けにマッコウクジラの漂着に遭遇した。1頭目は紀伊水道に沈められ、標本として迎えることは叶わず、少し寂しい思いをした。

絵本によると、今この瞬間、世界中の海には約10万頭ものクジラたちが沈んでいるという。私の出会った1頭目のクジラもその仲間になり、たくさんのホネクイハナムシたちに覆われているのかと思うと、何か満たされたような気持ちになる。

『化石をつけた少女

—メアリー・アーニング物語—』

作・絵：キャサリン・ブライトン／訳：せな あいこ

評論社 2001年

1810年（※1）。イギリス南部、ライム・リージス。少女メアリーは、兄のジョーと海岸に「ほりだしもの＝化石」を探しにいく。「かあさん」の店で売るためだ。立派なアンモナイトを見つけて持ち帰るもの、夜にやってきた嵐で家も店もめちゃくちゃになってしまった。しかしメアリーとジョーは、家の修理をご近所さんに頼む

と、再び海岸へ向かう。嵐の後で崩れた崖には、巨大で完璧な「クロコダイル」の全身があった——(※2)。

避暑地であるライム・リージスでは、観光客による貝殻や化石の収集が流行した。お金持ちたちは、「貴婦人の指」と称されたペレムナイト、呪われて石化したヘビと思われていたアンモナイトなど、拾うだけでなく、地元民の採集品も購入した。「とうさん」は家具職人で、この町に住み着き、副業として、化石を自宅に並べて売る商売を始めた。父の目は確かで、信頼を集め、店は繁盛した。

化石は最初に見つけた者に所有権があるそうだ。嵐になつたら水浸しになる海辺の家は住むには過酷なところだったが、西にマンモス・ビーチ、東にブラック・ヴェンと化石を多産する海岸にはさまれ、すぐ採集に行ける立地だった。父亡き後は、化石の手ほどきを受けた子どもたちが、困窮する家を支えるため採集に励んだ。そして発見したのが、のちに世界初の魚竜とわかる巨大な爬虫類化石である。前代未聞のお宝を一目見ようと店には行列ができ、人々は一人1ペニーの観覧料を支払った。さらには噂を聞きつけた領主ヘンリーによって23ポンドで買い上げられ、一家はようやく潤うことになる。

本書は、その後も、首長竜や翼竜など素晴らしい化石を発見し続けたメアリー・アニングの少女時代を取り上げている。実際にさらりと描かれているので、これだけを読んでも背景がわからないかもしれないが、1995年頃まで、メアリーの存在はほぼ知られていなかった(※3)。この卓越した眼と手を持つ労働者階級の女性の業績が研究者によって明らかにされ、1999年には生誕200年を祝うシンポジウムがライム・リージスで催された。本書もこの年に出版されている。

2025年は、宮城県南三陸町歌津で日本初の魚竜化石が発見され、国の天然記念物に指定されて50周年となる。科学史の中に埋没しかけていた女性に光をあてる本として、地質学を目指す少女たちに、この本を紹介したい。

※1：絵本では1810年とされているが、実際には1812年、メアリー13歳時の発見。

※2：絵本では一回で化石が見つかったように描かれているが、まずジョーが頭部を発見し、その後胴体が露出するのを注意深く観察、のちに発掘したとも言われる。

※3：朝日選書「メアリー・アニングの冒険」に、詳しく書かれているのであわせておすすめしたい。



(地独) 大阪市博物館機構事務局職員 釋 知恵子

『みつけた！

生きものからの挑戦状 冬の生きものをさがせ！』

企画・写真：飯村 茂樹／構成・文：中野 富美子

ほるぷ出版 2023年

<https://www.holp-pub.co.jp/book/b630158.html>



大学を卒業した後10年ほど、月刊絵本の編集の仕事をしていた。担当していたのは自然科学絵本で、時々、自然写真のカメラマンの撮影に同行させてもらっていた。その日は、越冬中の昆虫を探す調査兼撮影について行った。雪がちらちらと降る極寒の中、山を歩き、昆虫を探す。最初はなかなか見つからない。カメラマンは昆虫を見つけると、キタキチョウは成虫で越冬し、日当たりのよい草むらの葉っぱの裏などにいること、ホソミオツネントンボも、低いところの枝に枝とそっくりな様子でとまっていることなど、その昆虫の冬の暮らしとともに探し方のコツを教えてくれた。そのうちに、少しずつ見つけられるようになり、見つけたときには少し誇らしい気持ちになった。この本を読んで思い出すのは、この日のこと。そして、この絵本の企画者であり撮影者である飯村茂樹氏も、当時、仕事で一緒にいた一人である。

図鑑や絵本の写真は、生き物の特徴が分かる写真が扱われていることが多く生き物を見つけることに苦労はないが、この絵本はそうではない。「見つけて」と生き物からの挑戦状がやってくる。「見つからない！」とページがめくりたくなても、もう少しがんばって探してみよう。次のページでは、「ここにいるよ！」と答えとともに、探すコツや、探すときに見つかる他の生き物、生き物のひみつとして暮らしぶりなどを紹介し、実際の生き物探しに野外へと誘う。野外の生き物たちは、この絵本のように、周りの風景に溶け込み、ときに尻尾など体の一部だけを見せて、そこにいるのだけれど、なかなか見つからない。これを読んだ読者が生き物を探したいと博物館の行事に参加し、知識と経験豊富な生き物探しの師匠に出会い、生き物のこと、その暮らしについてもっ

と興味を持つてくれると嬉しい。絵本は全4巻で、春夏秋冬の生き物たちから、さまざまな挑戦状がやってくる。

『わたしたちのカメムシずかん やっかいものが 宝ものになった話』

文：鈴木 海花／絵：はた こうしろう

福音館書店 2020年

<https://www.fukuinkan.co.jp/book?id=6661>

カメムシと聞くとどんなイメージがあるだろう。一番に思い浮かぶのはきっとあの臭い。この絵本の舞台である岩手県葛巻町では、カメムシは「やっかいもの」。農作物の被害も出ているし、秋の一番多いときには、体育館を使う前にまず掃除が必要で、掃き集めたカメムシがゴミ袋4つ分になると聞けば、それはやっかいだらうと思う。そんなカメムシのことを、葛巻のある小学校で、調べてみようということになった。きっかけは、校長先生からの提案。葛巻にはいろんな種類のカメムシがいるようだけれど、校長先生も知らないので、一緒に種類を調べて、みんなで『カメムシはかせ』になろうという提案だった。見つけたカメムシは、図鑑で名前を調べて、見つけた日時や場所などの記録と標本とともに、廊下の壁に張り出すというまさしく博物館的な活動が始まった。その後、カメムシ調べに子どもたちは引きこまれ、見つかるカメムシの種類も増えていく。そして、町のカメムシ図鑑作りへと発展していき…という実話がもとになったお話。詳細はぜひ、読んでいただきたいが、この話でとても素敵だなと思うのが、子どもたちの活動に寄り添う大人たち。最初の校長先生の提案、学校にある図鑑では載っていないカメムシが見つかるようになったので日本で一番たくさんカメムシがのっている図鑑を買って調べる、「図鑑作り」への発展、カメムシの同定に間違いがないか見てもらうために専門家に連絡する、そして、それに応えるカメムシ博士など。大人の理解、支援、併走などにより活動が広がり、深まっていく。きっと周りの大人たちも楽しかったのだろう。博物



館に勤める者として、こういうふうに自らが楽しみ、寄り添って働きかけることができる人でありたいと思う。

絵本作家 かんちく たかこ

『たんぽぽ』

文・絵：荒井 真紀／監修：高橋 秀男

金の星社 2015年

冬を越したタンポポが、つぼみを出して花をさせ、綿毛を広げて種子をとばし、新たな土地で芽吹くまでのお話です。

冬越しのロゼットが描かれた中扉を開くと現れるのが、根っこ。野に咲くタンポポの、ゴボウのように長い根っこが、縦長の絵で描かれます。こんな姿が、土の中に隠れているなんて…みっしりのびた側根の、土をつかんで踏んばっているように、おどろかされます。

その根っこのすぐ上に、つぼみは準備されています。春がやってくると、つぼみは少しずつ大きくなって、地面の上に顔を出します。

この絵本を読んで、感銘を受けたシーンのひとつです。つぼみは地面より下で大きくなって、やがて葉をかき分けるようにして姿を現すのだと、はじめて知りました。春の野原で、放射状の葉っぱのまん中に埋もれるようにあるつぼみを自分の目で確認したとき、もう一度感動しました。見ていてどうで見ていなかったことでした。

ぐんぐんのびた花茎の先のつぼみがほころび、外側から花びらを開くさまは、3枚の絵で表現されます。3枚だけですが、絵と絵の間が想像できて、花びらが開いていくようすが見えるようです。荒井真紀さんの丹念な観察があってこそ描きうる絵なのでしょう。

荒井さんの絵は、やわらかな色合いで、細く繊細な線で描かれます。透明水彩だそうですが、綿毛の白を表現するのに苦心されたそうです。グレーにもブルーにもならないように、白い紙の上でも白に見えるように、工夫を重ねたられたことでしょう。

200個の綿毛がならぶ見開きは、1本ずつ観察しながら描いたそうです。1本の花茎から、こんなにたくさんの綿毛が飛びたって、たねを遠くへと運ぶのだと、圧倒的な絵の力で伝えてくれます。



読み終わったあと、野に出て小さな草花を観察したくなる絵本です。

『ほうさんちゅう ちいさな ふしきな 生きものの かたち』

文：かんちく たかこ

監修：松岡 篤／アリス館 2019年

拙著になりますが、海にくらすプランクトン、放散虫の絵本です。

絵本をつくるために、ほんものの放散虫の化石をはじめて見ました。光学顕微鏡をのぞくと、ガラス質の美しい形の放散虫が幾重にも連なって、きらきらと輝いていて、とても特別な感じを受けました。

それもそのはず、この放散虫は、有人潜水調査船「しんかい6500」が、マリアナ海溝の深度6300メートルから拾い上げてきた1億4000万年前の石から発見されたもので、当時の形そのままに保存されていたのです。そんな来歴を聞くと心躍りますし、大きな恐竜が闊歩していた時代の海にくらしていた生きものの化石が目の前にあると思うと、わくわくします。

その後、監修の松岡篤先生から、先生が研究用に撮影したこの放散虫の電子顕微鏡写真が送られてきました。2000枚以上あって、どれもこれもふしきな形のものばかり。1枚ずつ何度もながめました。

こんなに複雑な形が、小さな生きものの骨格だなんて、ほんとうにおどろきます。形が多様なことも、骨格が二酸化ケイ素でできていて、美しいガラス質だということも魅力です。この魅力をどうにかうまく伝えたいと、楽しく読める、美しい本になるよう工夫しました。

「とげとげ」とか「つんつん」「きちきち」といった言葉遊びをしながら似た形でならべていくうちに、植物のたねのようにも、貝や塔のようにも見えてきました。ふしきな形にびっくりした子たちが、科学だけでなく、絵画や建築、デザインなどにも興味をもつようになったら、絵本から世界が広がって、すばらしいな、なんて想像しながら、言葉を選んでいきました。

放散虫は現在も世界中の海をぶかぶかただよっています。小さくて見えないけれど、ほんとうはすぐそばに放



散虫がくらす世界があることを感じたらうれしいです。

福岡市科学館 丹野 佳代子

『あーと いってよ あー』

(幼児絵本ふしきなたねシリーズ)

文：小野寺 悅子／絵：堀川 理万子

福音館書店 2015年



言葉を発する楽しさを体感することができる絵本です。音の高低や強弱、長さの異なるたくさんの「あー」。これに、上を向いて、下を向いて、胸をたたいて…と動作が加わること

によって、「あー」の音が変化します。そして、感情によっても「あー」の意味合いが変わっていきます。読者は、異なる色や大きさ、形のたくさんの「あー」を、それぞれのイメージで表現しながら、五感をフル稼働させて何度も楽しむことができます。また、自分だけではなくお互いに触れ合い感じてみることで、音の要素や個性にも関心を持つきっかけにもなるはずです。これは、一緒に歌ったり運動をしたりする感覚に似ているかもしれません。大きく身体を動かしたり大声を出したりしても構わない場所での読み聞かせをお勧めします。

この本は、教員時代に小学校で放送委員会やアナウンスクラブを担当していた頃のことを思い出させてくれた1冊もあります。喉に手を当てながら发声練習をした時のこと、子どもたちは、既に声は「てのひらに びりびり かんじる」ものであることを知っていたものの、逆に“声帯が振動しない音（無聲音）”があることを“発見”し、驚きで目を丸くしていました。これがきっかけとなって、子どもたちは、知ってるようで知らなかつた音声の不思議に興味を持ち、注意深く聴き考へるようになりました。この本には、発達段階に応じていろいろなアプローチができる魅力を感じます。また、どのページにも「直感的に意識して发声することができる工夫」が仕掛けられています。「ここで子どもたちはきっとこんな表情をするだろう」と、七変化する子どもたちの顔を重ね、私も心躍らせながらページをめくりました。今後、放送やアナウンスについて話をさせていただく時には、

絶対に参考にさせてもらおうと心に決めています。

う。内なる宇宙をも拡げてくれる本です。

『このよで いちばん はやいのは』(かがくのとも絵本)

原作：ロバート・フローマン／翻案：天野 祐吉／絵：あべ 弘士
福音館書店 2011年

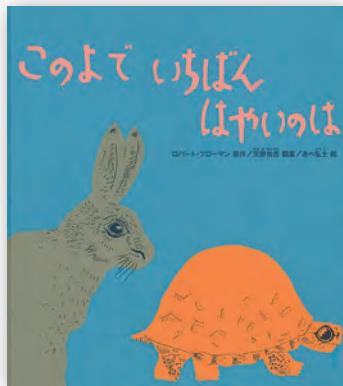
「はやい」とか「おそい」っていうのは、なにかに くらべていえることだね。」

身近なわかりやすい事例と共に、最初のページに「速い」と言う言葉の定義が示されています。日頃何気なく使っている言葉の意味をあらためて意識させることの重要性を感じました。

この絵本の中では、動物や乗り物、音、宇宙機など「もっと はやいもの」が紹介されていきます。登場する動物や乗り物は、子どもたちが聞いたことのあるものが多く、読み進める向きと同じく右を向いた姿で描かれています。地上を駆け抜けるチータ、風を切って飛ぶハヤブサと、ページをめくるたびに動物たちが一斉に同じ方向に向かって走り出し、本当に競走をしているかのようです。ダイナミックでスピード感のある挿絵とリズミカルな言葉に誘われて、「もっと はやいもの」「いちばん はやいもの」を知りたくなり、読者がページを開くスピードもだんだんと速くなっていくように感じました。

一番速いものを探して、地球上の生き物や乗り物から宇宙へと広がっていく速さ比べ。後半は地球の自転速度や公転速度という、日常生活では全く感じることのない速さも登場します。実感はなくても、地球が動いていることや、自分が知っているどんなものよりも早く動いているものがあることに驚き、子どもたちの知的探求心はますます高まっていきます。そして最後に登場する「このよで いちばん はやい」ものとは…!?

これまでの“物理的な速さ比べ”とは全く異なるアプローチに、子どもたちの反応は様々。「へえ」という顔で素直に納得する子、「え？ それは話が違う」と眉間にしわを寄せ納得できない顔の子、一瞬驚くものの「なるほどそう来たか」と言わんばかりにニヤリとする子。数年経って読み返すとまた違った感想をもつことでしょ



広島市こども文化科学館 大谷 信吾

『MOONSHOT』

Brian Floca

Brian FlocaのMOONSHOTは、アポロ11号による人類初の月面着陸を描いた2009年の絵本だ。タイトル通り、月に人類を送り届けたという出来事は人類史上初の偉業であり、今もなお奇跡的とすら言えよう。本書は、その過程を平易な言葉と、水彩で柔らかく描き込まれた挿絵によって丁寧かつテンポよく辿っていく。月へ行って帰ってくるはどういうことだったのか、また当時の人々の興奮がどれだけであったか、まるで見てきたかのような読書体験を教えてくれる。

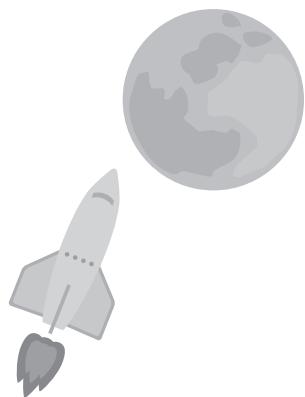
発射場では、カウントダウンとともに地上で見守る人々の様子から“LIFTOFF！”で見開き2ページでドアップの巨大なエンジンが激しく火を噴く、と次は空へと飛び上がった機体が引きの画角で小さくなっている。アルファベットの配置や装飾も駆使した表現によって、文字は絵の一部となり、読者は息をのみながらページを繰るはずだ。

「動」だけでなく「静」の描写も素晴らしい。暗闇を月へと飛んでいく、遠く、冷たく静かで、空気もなく、生命もなく、だが空に輝いている。飾らない単純な言葉で、短く、繰り返されるフレーズが詩のように響く。星の見えない月のからっぽの空には、高く、今度は地球が輝いている。

宇宙飛行士たちが無重力状態で過ごす時間も、身近なたえを用いて平易な言葉で描かれる。床が壁になり、天井が床になる、という書きぶりが好きだ。

また、アームストロング船長「人類初の一歩」の名言は登場しない。英雄的な言葉でなく、実際にそこにいた3人を三人称で端的に描写することで、逆に出来事の重みや月世界が際立っている。

すでに半世紀以上前のアポロ計画は、今日の子どもたちにとっては教科書の1ページにすぎないかもしれない。しかし、月に人が降り立ったことがどれほど驚くべき“MOON SHOT”だったのかワ



クワクとともに魅せる本書は、読者を釘付けにする力があるのではないか。当時世界の人々をテレビに釘付けにしたように。

本書は、古書フェアで見つけ一目惚れして手にした。邦訳はないが、英語絵本としてECサイトから入手もできそうだ。4歳から、絵だけでも十二分に楽しめる。少し大きな子には表紙と裏表紙の裏に図鑑的ミッション解説も。

『天動説の絵本』

作：安野 光雅

福音館書店 1979年

地球が丸いということを、幼い頃どのようにして「知った」だろうか。親がそう言った、学校で教わった、本に書いてあった、あるいは科学館で太陽系の模型を見た——多くの場合はそのように知識として与えられたのであって、自ら実証に至ったわけではない。安野光雅『天動説の絵本』は、この「子どもでも知っている」知識の背後に、過去から今に至る無数の人間的好奇心や観察、恐怖、欲望、排斥の積み重ねがあることに気づかせてくれる。

このように書き出してしまうと、何やらカタい本かと思われてしまうかもしれないが、そうではない。

まず、本書はとても美しい。額縁のような装飾が全体を囲う絵本の各ページは、吉びた紙に描かれた絵画のようだ。メルヘンチックな西洋風の建物や城が柔らかなタッチで細かく描かれ、農夫や星占い師、兵士といった人物の装いは緻密でワクワクさせる。

また、本書は天動説を教える本ではない。文章と絵は解説や説明ではなく、コバルニクスもコロンブスもその名は登場しない。無数の名もなき人々の視点や、暮らしの気配が、時を進みながら描かれていく。はじめ、直線だった地面はページを繰るごとに丸みを帯びていき、最後には地球儀として現れる。つまりこの絵本全体が、私たちの世界を外部から俯瞰する視点だったと知らされる仕掛けだ。

だれもが、地球が丸いことも太陽の周りを回っていることも知っている。しかしその知識を「大人がそう言つ



ているから」と受け入れるなら、かつて教義に従って天動説を信じた態度と本質的に変わらない。現在から見れば誤りとされる考え方にも、当時の観測や思考に合理性があり、昔の人が愚かだったわけではない。

本書が見事なのは、そうした歴史が「絵本の物語」で描かれていることだ。知識を教えるのではない。おはなしの世界に身を置き、描かれる人々を想像することで、世界をどのように受け止めてきたのか、という人間の姿勢そのものが浮かび上がってくる。科学とは、不变の真理を積み上げたものではなく、その時代ごとに最適な枠組みを更新してきた豊かで人間的な営みであることを、『天動説の絵本』は改めて気づかせてくれる。

フリーライター、『星ナビ』書評担当 原 智子

『星空写真家 KAGAYA』

月と星座』全5巻

監修・写真：KAGAYA／文：山下 美樹

金の星社 2025年

この本はタイトルのとおり、星空写真家で映像クリエイターのKAGAYAさんによる星空案内本で、厳密には「絵本」ではない。しかし、彼の天体写真は美しく、絵本のような“物語”を感じる。それは、月や星を印象的な建物や幻想的な自然とともに写しているから。「こんな場所で月を眺めたい」「雪原に立つ木と星がクリスマスツリーみたい」など子どもは想像を広げるだろう。

もちろん、解説本としても充実している。『月』では、さまざまな月の形を見せながら「なぜ満ち欠けするのか」「季節による見え方の違い」を説明し、月食や日食の仕組みと種類を解説。さらに、「月虹(げっこう)=ムーンボウ」や「月光彩雲」といった、神秘的で珍しい現象をとらえた写真も載せている。『春』『夏』『秋』『冬』では、季節を代表する星座と星の動きを紹介し、観察方法や撮影のコツも教えてくれる。また、4冊にわたり「惑星」「流星」「彗星」「オーロラ」を取り上げ、絵で見せる以上のリアルな輝きを届けてくれる。

対象は小学校中学年以上、紙は大判の厚手、表紙はグロスPP加工の図書館用堅牢製本と、ほぼ絵本のような造本で気軽に手に取れる。ただし、家庭で全5巻をそろえると高額になるから、まずは博物館や科学館でこの本に“出会い”、天文の魅力や不思議さを知ってほしい。そのうえで「自宅で毎日読みたい」「実際の星空観察で使いたい」という子どもには、5巻の内容を1冊に再編集した『月と星座 夜空への誘い』を勧めよう。四六判

の並製で価格も手頃だ。



『宇宙でウンチ』

作:A.ボンドー=ストーン& C.ホワイト

絵:L.ケンセス/訳:千葉 茂樹

あすなろ書房 2025年

もう「ウンチ」という言葉だけで、ソワソワしない子はいない！こんな無敵なキラーワードを見せつけられたら、誰だってページをめくりたくてウズウズしちゃう。でも、本屋でこの本を手に取るのは恥ずかしいと思う子がいるかも。そんなとき、博物館や科学館にこの絵本が

あれば「科学の本だ！」と堂々と読める。

内容は、人類が初めて宇宙に行ったときから現在までの「宇宙で排泄する方法」の進化と苦労。日常生活でも欠かせないトイレ事情を、真正面から真面目に描いている。宇宙船という限られたスペースにどうトイレを作るか。無重力の空間で排泄物をどう処理するか。宇宙飛行士の健康維持のために、災害避難所のトイレ並みに重要な問題だ。

NASAでは「快適な宇宙トイレ」を目指し、さまざまな創意工夫を重ねた。しかし、ときには宇宙飛行士の失敗で、ときには機械の故障で、ウンチがあらぬ所に……なんてことも。やがて安定したトイレが開発され、世界中の宇宙飛行士がトイレを使いながら宇宙で長期活動している。さらに「将来、火星などトイレのない場所でどうするか」という「宇宙ウンチチャレンジ」まで開催され、多くのアイデアが集まった。

昨今「学校でウンチをすることが恥ずかしい」という子どもがいるらしい（わかる気もする）。しかし、ウンチは人間にとて欠かせない基本的な生命活動で、この本を読むことにより「学校でも宇宙でも家でも、ウンチは大事！」と気づく子がいるかもしれない。笑ってしまうようなエピソードの裏に、科学と人間の知恵がしっかり息づいている絵本。



国立国会図書館国際子ども図書館 高橋 奈緒美

『とりになったきょうりゅうのはなし 改訂版』

作:大島 英太郎

福音館書店 2019年

本書は、絶滅したと思っていた恐竜の一部が、鳥に姿を変えて、現在も進化を続けているという「鳥類の恐竜起源説」を描いた絵本である。文章は、すべて平仮名で書かれているので、小さい子どもにも読みやすく、内容も簡潔でわかりやすい。

恐竜研究は日進月歩の分野であり、恐竜をテーマとした絵本や図鑑も、出版された年代によって恐竜の描かれ方が異なる。本書の表紙中央に描かれている羽毛恐竜「シ

ノサウロプテリクス」もその一例だ。2010年刊行の旧版では、頭部は暗色、胴体や尾は灰茶色の羽毛に覆われた姿で描かれていたが、2019年刊行の改訂版である本書では、背は明るい茶色、腹部は白色で着色され、頭部と尾は茶と白で模様が描かれている。これは、化石に残された羽毛の痕跡と微量の色素から、色や模様を推定した最新の研究結果を反映したものである。

国際子ども図書館では、2019年の夏休みに「恐竜」をテーマにした小学生向けのブックトークを実施し、その中で本書を紹介した。最新の研究によって色や模様がわかるようになった恐竜がいることを説明した後、旧版と改訂版を並べて見せると、子どもたちは、恐竜の描かれ方の違いを夢中になって探していた。また、2024年3月から提供を開始した小学生向けのオンラインコンテンツ「しらべる・まなぶ・よむ」でも、「科学のまど」のブックトーク動画「きょうりゅう」で本書を紹介している。

本書は、太古の恐竜が身近な鳥に進化するまでの過程を子どもたちにわかりやすく伝え、壮大な命のロマンを感じさせてくれる1冊である。

「しらべる・まなぶ・よむ」(小学生向け)

<<https://www.kodomo.go.jp/guide/kids/>

「調べる・学ぶ・読む」(中高生向け)もある。

<<https://www.kodomo.go.jp/guide/ya/>



だかわかる？」のように語りかける文章のところで子どもたちが返事をし、まるでダンゴムシと会話をしている感覚で絵本の世界に入り込んでいる光景を目にする。ダンゴムシがコンクリートや石を食べること、2日かけて脱皮し、抜け殻は必ず食べること、実は昆虫ではなくカニやエビと同じ甲殻類であることなど、ダンゴムシの知られざる生態が次々と紹介され、子どもたちはその都度驚いた表情をし、歓声を上げたり口々に感想を言ったりする。多くの子が思わず身を乗り出し、知らず知らずのうちに絵本に近付いてくるなど、子どもたちの素直な反応が見られる。読み聞かせの後も、「ダンゴムシが好き。」「家で飼っている。」など、大勢の子がダンゴムシにまつわる思い思いのエピソードを語り出し、読み手の図書館員にもダンゴムシが子どもたちにとって特に身近で思い入れのある虫であることが伝わってくる。

大人が読んでも新たな発見があり、親子で一緒に楽しめる。おはなし会の後「ダンゴムシの生態がよく分かった。」という感想が保護者から出たり、ダンゴムシとよく似たワラジムシとの違いについて、親子で話しながら帰ったりする姿も見られ、読後にダンゴムシへの親しみや関心が大きく広がる1冊である。本書の最後には、ダンゴムシの飼育方法も紹介されており、実際に子どもたちが飼う体験にも繋がるかもしれない。



国立国会図書館国際子ども図書館 松戸 沙耶佳

『ぼく、だんごむし』

文:得田 之久／絵:たかはし きよし

福音館書店 2005年

本書は、柔らかいタッチの貼り絵で描かれたダンゴムシが話し手となり、ダンゴムシの生態を子どもに分かりやすく紹介した絵本である。

国際子ども図書館では、4歳以上の子どもとその保護者を対象とした「子どものためのおはなし会」を行っている。プログラムには科学の絵本の読み聞かせを組み込むこともあり、本書は特に、子どもたちが楽しんでいる様子がうかがえる本である。

「子どものためのおはなし会」で本書を読むと、「なん

空間創造によって
人々に「歓びと感動」
を届ける

株式会社 乃村工藝社

東京都港区台場2丁目3番4号 TEL: 03-5962-1171 (代表)



海外博物館事情

No.189

安井 亮

■企画展・特別展

マニラ国立自然史博物館で、気候変動展を開催

2025年4月28日に、フィリピンの首都マニラ（都市圏人口：2,670万人）にある、マニラ国立自然史博物館で、気候変動展「カトゥンバリクワサン：気候、自然、そして人々のつながり」が開幕した。フィリピンの公用語フィリピノ語のカトゥンバリクワサン（Katumbalikwasan）とは、地球温暖化による環境変化に対する復元力や適応能力を示す「気候変動レジリエンス」の意味をもっており、同展では、フィリピン政府をはじめ、多くの草の根運動による気候危機への対策が紹介されている。さらに、国民一人ひとりが立ち上がり、声を上げ、環境の未来に責任を持つよう促す、行動への呼びかけを訴えている。同展は、フィリピンで気候変動に対して活動を行っている最大の市民ネットワーク「フィリピン気候アクション Aksyon Klima Pilipinas」が、マニラ国立自然史博物館（2017年9月開館）と、共同で企画・制作された。同館にとって、気候変動展に取り組んだ、はじめての試みだ。会期は、2026年4月まで（閉幕日未定）。

Katumbalikwasan: Linking Climate, Nature and People.

National Museum of Natural History. Manila.

<https://www.nationalmuseum.gov.ph/2025/04/28/nmp-aksyon-klima-pilipinas-launches-katumbalikwasan-special-exhibition/>

<https://aksyonklima.org/>

タルトゥ大学自然史博物館（エストニア）で、気候変動展を開催

2025年4月29日に、タルトゥ（都市圏人口：165,000人）にある、タルトゥ大学自然史博物館で、気候変動展「手で触れることができる気候：今後わたしたちは、どうなるのだろうか？」が開幕した。同展では気候変動と人々の生活に及ぼす深刻な影響について探求している。気候変動に関する自然のプロセスと人間の活動の影響の両方について紹介している。また、環境保護のための小さな一歩でも大きな影響を与え、誰もが貢献できるという観点から、問題への解決策も提示している。この展覧会は、タルトゥ大学、タリン大学、ノルウェーのオスロ大学自然史博物館による、共同プロジェクト「最先端の展示とそれに伴う教育プログラムを通じて、ノルウェーからエストニアへの気候変動に関する知識の伝達」のひとつ事業であり、欧州経済領域（EEA）およびノルウェーのグランス基金の支援を受けて、企画・制作された。キュレータは、タリン大学のルコ・オレスク准教授 Arko Olesk（サイエンスコミュニケーション）。会期は、

2025年11月16日まで。タルトゥ大学自然史博物館（1802年設立）で閉幕後、ヨーロッパ各地の自然史博物館に巡回される計画だ。

Kliimanaitus - Kaega katsutav kliima, Mis meist saab?

Tartu Ulikooli loodusmuuseum ja botaanikaed. Tartu.

<https://natmuseum.ut.ee/et/kliimanaitus-tartu-%C3%BClikooli-loodusmuuseumis>

グラーツ自然史博物館（オーストリア）で、気候変動展を開催

2025年12月5日に、シュタイアーマルク州の州都グラーツ（都市圏人口：306,000人）にある、グラーツ自然史博物館で、シュタイアーマルク州の気候変動展が開幕される。同展では、現在のシュタイアーマルク州地域の気候変動（気温と降水量の推移、嵐の頻度）、気候変動の結果（森林破壊、侵入生物や病原菌の拡散など）が紹介され、州政府による対応策が明らかにされる。シュタイアーマルク州内外で、気候変動の影響は既に目に見える形で現れている。具体的には、氷河面積の減少、積雪量の減少、豪雨の強度と頻度の増加として現れている。2005年、2009年、2013年、2016年、そして2024年に、大規模な洪水が州内で起こった。キュレータは、Michael C. Niki Knopp, Michael Pinter, Wolfgang Paill。会期は、2028年12月31日まで。同展は、グラーツ自然史博物館（1811年設立）によって、はじめて手がけた気候変動展だ。

Klimawandel in der Steiermark.

Naturkundemuseum und Studienzentrum. Graz, Steiermar.

<https://www.museum-joanneum.at/naturkundemuseum/unser-programm/ausstellungen/event/klimawandel-in-der-steiermark>

米ブルース博物館で、アラスカ州の気候変動展を開催

2025年3月6日から2025年10月19日まで、大都市ニューヨークの郊外のコネチカット州グリニッジ（都市圏人口：64,000人）にある、ブルース博物館で、アラスカが直面している気候変動をテーマにした「薄氷の上で：アラスカの温暖化する荒野」が開催された。アラスカ州は米国の他のどの州よりも急速に温暖化が進んでおり、野生生物や生態系に連鎖的な影響を及ぼしている。同展では、こうした気候変動の状況を、ブルース博物館（1908年設立）の所蔵品とアラスカ州のフェアバンクス博物館（1890年設立）から借りた哺乳類の剥製を使って、展示を構成した。キュレータは、Dr. Daniel Ksepka（古脊椎動物学）。On Thin Ice: Alaska's Warming Wilderness.

Bruce Museum. Greenwich, Connecticut.

<https://brucemuseum.org/exhibitions/on-thin-ice-alaskas-warming-wilderness/>

<https://www.youtube.com/watch?v=VBl1-hshLDE>

米ヒューストン自然科学博物館で、「自然死」展を開催

2024年6月28日に、テキサス州ヒューストン（都市圏人口：782万人）にある、ヒューストン自然科学博物館（1909年設立）で、「自然死」をテーマにした、企画展が開幕した。同展では、人（ひと）の死の要因になりうる、自然界の「動物」「植物」「鉱物」の様々な危険が紹介されている。キノコ、ヘビ、クモ、さらには身近な食べ物など、人間がほぼ毎日触れるものが、例として挙げられている。キュレータは、Nicole Temple（Vice President of Education）。閉幕時期は、未定。

Death By Natural Causes.

Houston Museum of Natural Science. Houston, Texas.

<https://www.hmns.org/exhibits/death-by-natural-causes/>

<https://www.youtube.com/shorts/g8HhhtbEu2Q?t=20&feature=share>

<https://www.youtube.com/watch?v=lgildNsVk0k&t=3s>
シュコダ博物館（チェコ）で、シュコダ・オートの130年の歩み展を開催

2025年5月10日に、中央ボヘミア州ムラダー・ボレスラフ（都市圏人口：107,000人）にある、シュコダ社の本社に設けられたシュコダ博物館（1995年開館）で、チェコを代表する自動車メーカー「シュコダ・オート」の130年の歩みを紹介した企画展が開幕した。同展では、1925年から現在まで自動車を生産してきた自動車づくりの歴史をはじめ、同社が1895年の創業期から生産を続けてきた自転車やモーターサイクルの歴史が、代表的な実車を使って紹介されている。会期は、2026年1月26日まで。館長：Andrea Frydlová。

130 Years of Škoda Auto.

Škoda Museum. Mladá Boleslav, Středočeský kraj.

<https://museum.skoda-auto.com/exhibitions>

https://www.skoda-storyboard.com/en/press-releases/skoda-auto-celebrates-130-years-new-museum-exhibition-showcases-heritage-and-innovation/?_gl=1*ly9vxiw*_gcl_au*MTczMDM5MzU4MS4xNzU0NDU3NTUz

<https://www.youtube.com/watch?v=Qu4Is3iEEi0>
デンマーク・モーターサイクル博物館で、BSAブランドのモーターサイクルの歴史展を開催

2025年4月17日から2025年10月19日まで、デンマーク南部は、ファルスター島（人口：44,000人）にある、デンマーク・モーターサイクル博物館で、かつてイギリスが世界に誇った、モーターサイクルのブランド「BSA」の代表的な実車を紹介した企画展が開催された。1977年設立の同館では、1897年から1985年まで各国で生産さ

れた、モーターサイクル約200台を所蔵しており、コレクションには、本田技研工業のCBX1000（1978年製造モデル）など、代表的な日本車が含まれている。代表：Søren Groth Therkelsen。

BSA.

Danmarks Motorcykelmuseum. Stubbekøbing, Falster.

[https://www.danarksmotorcykelmuseum.dk/en/season2025/](https://www.danmarksmotorcykelmuseum.dk/en/season2025/)

■ 常設展示

米フロスト科学博物館で、古生物学展示「発掘現場」をオープン（2024年6月）

2024年6月21日に、フロリダ州マイアミ（都市圏人口：646万人）にある、フロスト科学博物館で、古生物学という学問を紹介する常設展示「発掘現場」がオープンした。同展では、フロスト科学博物館の古生物学研究部が2017年の開館以来、南フロリダ全域で収集してきた古生物標本を使って、「古生物学者はどうやって化石を見つけるのか？」「化石を発見したら、どうやって採集し研究するのか？」についての疑問に対して、明確な答えが用意されている。展示室に隣接して設けられた、化石準備作業室では、熟練した技術者によって、収集された化石の洗浄作業がガラス越しに見ることができ、また多くの化石標本が手で触ることができる。同展の目玉は、これまでに発見された中で最も完全なティラノサウルスの頭骨である、「タフツ・ラブ（Tufts-Love）」の実物大レプリカ標本だ。

The Dig.

Phillip and Patricia Frost Museum of Science. Miami, Florida.

<https://www.frostscience.org/exhibition/the-dig/>

<https://www.timeout.com/miami/things-to-do/the-dig-at-frost-science>

■ 閉館

米ジマーマン自動車博物館が閉館（2024年）

2024年10月24日に、ロサンゼルス（都市圏人口：1,860万人）近郊のエル・セクンドの、ジマーマン自動車博物館がコロナ禍の後遺症による経営難で閉館した。

2003年設立の同館では、主に1886年から2000年まで、主にアメリカで生産された自動車の高級車約130台が所蔵されていた。

Zimmerman Automobile Driving Museum. El Segundo, California.

https://en.wikipedia.org/wiki/Automobile_Driving_Museum

https://www.tiktok.com/@latimes/video/7429480431667432735?is_from_webapp=1&sender_device=pc

11月12月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
あすなろ会こども遊學館 (釧路市こども遊學館)	青少年のための科学の祭典 釧路大会 サイエンス屋台村	11月3日
	クリスマス・スペシャル	12月13日~12月14日
岩手県立博物館	テーマ展「いわての酒造り～酒からSAKEへの今昔物語～」	9月27日~12月7日
山形県立博物館	両羽博物図譜～博物学者松森胤保に描かれた動物たち～	9月27日~12月14日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「野辺山天文台展～ウラ側まで徹底大公開!～」	10月4日~12月21日
	スペースパーク企画展「宇宙からの落とし物」	12月6日~2026年1月12日
つくばエキスポセンター	カガクノミカター感じてみよう科学のふしぎ～	11月15日~2026年1月25日
産業技術総合研究所 地質標本館	企画展「南海トラフ地震研究の今－地質を知り地震に備える－」	9月9日~12月7日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	第93回企画展 どんぐり～魅力にはまって さあたいへん♪～	10月11日~2026年1月25日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「Skill is Magic! 技能五輪」	10月4日~11月30日
	冬の特別イベント「バラバラ・バランス展」	11月29日~2026年1月12日
栃木県立博物館	テーマ展「恐竜の小部屋」	7月19日~11月3日
	テーマ展「どーしたもんだろ とちぎの外来生物」	7月19日~2026年4月12日
	企画展「“異”常の色・形～時に思いが宿るもの～」	10月4日~11月24日
	テーマ展「ミミズ」	11月15日~2026年6月21日
	テーマ展「姿川村の遺物（モノ）語り～野澤岩藏コレクションの世界～」	12月13日~2026年2月1日
	テーマ展「巡回展 栃木の遺跡」	12月13日~2026年2月1日
	テーマ展「昔のこと知ってつけ?～道具を知れば暮らしが見える～」	12月20日~2026年3月29日
群馬県立自然史博物館	第72回企画展「ながいながい骨の旅」	7月19日~12月7日
川口市立科学館	シン・忍者展－忍術を科学で学べ！－	12月13日~2026年2月8日
埼玉県立自然の博物館	特別展「群れる鳥」	10月25日~2026年2月23日
千葉県立中央博物館	トピックス展「利根川の高瀬船」	10月11日~12月7日
	秋の展示「水辺の昆虫」	10月18日~12月21日
	トピックス展「十二支にちなんで－午年－」	12月16日~2026年1月25日
港区立みなと科学館	2025秋の企画展 ちがうってふしぎ！～絵本から考えるネコとイヌ～	9月10日~11月24日
	2025冬の企画展 進化のカタチ	12月10日~2026年2月23日
たばこと塩の博物館	けむりと人々のつながり～メソアメリカの記憶	9月20日~12月21日
東武博物館	就役から65年 みんなのDRC（デラックスロマンスカー）	10月28日~2026年3月1日
郵政博物館	企画展『終末のワルキューレ』	10月4日~12月14日
	「すべてウマくいく!! 令和八年『午』年 年賀状展」	12月20日~2026年1月18日
板橋区立教育科学館	企画展『宇宙線～それは天からのメッセージ～』	12月23日~2026年1月12日
多摩六都科学館	冬の特別イベント「ロクトロボットパーク2025」	12月25日~2026年1月12日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	特別展「初三郎式、かながわの描き方－地形表現の科学－」	7月19日~11月9日
平塚市博物館	「日本産アゲハチョウ属幼生期のすべて」展	10月2日~11月3日
	秋季特別展「丹沢でみつけたスゴい石～丹沢山地の化石・岩石・鉱物」	10月25日~2026年1月12日
	野尻抱影生誕140周年記念展	11月7日~2026年1月12日
	野尻抱影 星の文人の軌跡	11月7日~2026年1月12日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開催館	展覧会名	開催期間
のとじま水族館	磯の生き物展	9月6日～12月28日
岐阜県博物館	博物館・岐阜大学連携 特別企画展「鳥の卵のひみつ」	7月12日～11月30日
岐阜かかみがはら 航空宇宙博物館	初飛行40周年記念企画展 「飛鳥」	7月19日～2026年1月12日
中津川市鉱物博物館	第32回企画展「黄色い石・金いろの鉱物」	7月19日～12月21日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	標本サファリー大地の動物・水の動物－ 蝶聖・高橋真弓氏を偲んで～富士川から日本列島へ、そして世界へ～	4月15日～11月3日 4月15日～11月3日
静岡科学館 る・く・る	古生代探検隊～三葉虫とめぐる進化の足あと～	12月20日～2026年2月15日
鳳来寺山自然科学博物館	秋・冬の特別展「草木染め展 身近な草花・樹木を使って」	10月18日～2026年1月18日
トヨタ産業技術記念館	トヨタコレクション企画展 「風人雷人～江戸の好奇心と明治の科学が育んだ電動への歩み～」	10月4日～12月14日
滋賀県立琵琶湖博物館	第33回企画展示 川を描く、川をつくる－古地図で昔の堤をさぐる－	7月19日～11月24日
大阪市立科学館	企画展「静電気の世界」	12月5日～2026年2月8日
大阪市立自然史博物館	第56回特別展「学芸員のおしごと－集める・調べる・伝える－」	11月1日～2026年2月1日
伊丹市昆虫館	特別展「いたこんカーニバル」	7月19日～11月25日
姫路科学館	第61回「姫路市児童生徒科学作品展」調査研究の部	11月1日～11月24日
鳥取県立博物館	大カブコン展－世界を魅了するゲームクリエイション	10月19日～12月7日
出雲科学館	身近な科学のふしぎ写真展	10月11日～11月24日
島根県立三瓶自然館	第5回日本星景写真協会写真展 星の風景	10月18日～11月24日
倉敷市立自然史博物館	第34回特別展「くらしを支えた岡山の石たち」	9月7日～11月9日
	第33回しぜんしくらしき賞作品展	11月15日～12月17日
	特別企画展 人生を豊かにする植物展	12月24日～2026年2月15日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	ただ今参上!忍者でござる 学べ健康の術	7月19日～11月3日
スマジ交通ミュージアム (広島市交通科学館)	秋季企画展「広島駅のいまむかし－新幹線がやってきた－」	10月10日～11月30日
愛媛県総合科学博物館	企画展「宇宙望遠鏡が拓く深宇宙」	10月18日～2026年1月12日
	企画展「アメイジングホログラフィックワールド～おどろきのホログラムの世界～」	10月18日～2026年1月12日
佐川地質館	特別展「蛇紋岩と謎に包まれた黒瀬川帯」	5月24日～2026年5月10日
北九州市立自然史・歴史博物館	企画展「おもちゃでタイムトラベル 昭和50年」	7月19日～11月3日
	秋の特別展「べらぼう」におもしろい印刷展」	10月11日～12月7日
	企画展「調べる・くらべる くらしと道具のうつりかわり」	11月15日～2026年4月19日
天草市立御所浦恐竜の島博物館	天草市立御所浦恐竜の島博物館 開館1周年記念特別展「恐竜の王者ティラノサウルスの進化」	9月20日～12月14日
熊本県博物館 ネットワークセンター	花をよ～く見てみよう	6月24日～12月21日
宮崎県総合博物館	焼酎のすゝめ－「宮崎の本格焼酎」の歴史と酒造と発酵のふしぎ－	10月18日～11月30日
沖縄県立博物館・美術館	いのちのかたち展－好奇心の標本箱－	12月23日～2026年2月23日

※次号(1月号)に掲載の1月2月の特別展情報は11月21日(金)までにお寄せください。

リニューアル情報

※次号(1月号)に掲載のリニューアル情報は11月10日(月)までにお寄せください。

つくばエキスポセンター

[更新箇所] 1階 進化系180°スクリーン「3DVRシアター」

[更新内容] 偏光メガネをかけて3D立体映像を見るシアターのリニューアルを行いました。今回のリニューアルでは、機器類の更新とともに映像システムも大幅に刷新しました。スクリーンを180インチの平面状のものから約320インチの半円状のものに更新することで、前方180度がスクリーンとなり、従来の平面状のスクリーンに比べて映像の迫力が増しています。また、体感音響装置(ボディソニック)と空気を噴出する装置を追加することで、より高い没入感が得られるようになっています。

[公開日] 2025年9月23日

[担当業者] 株式会社ピー・ビーシステムズ



こころを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

 **Tanseisha**

空間創造のプロフェッショナル 株式会社丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーザンテラス19F
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL_03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社東京サイエンス
TEL03-3350-6725 FAX03-3350-6745
<http://www.tokyo-science.co.jp>
E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

東日本大震災・原子力災害伝承館

The Great East Japan Earthquake and Nuclear Disaster Memorial Museum

〒979-1401

福島県双葉郡双葉町中野39

<https://www.fipo.or.jp/lore/>



伝承館外観

東日本大震災・原子力災害伝承館は東日本大震災と原子力災害の記憶と教訓を伝えるため、2020年9月20日に開館し、今年で5周年を迎えました。2011年3月11日から14年が経過し、間もなく15年になろうとしていますが、原子力災害は今もなお継続しています。福島では2011年の原子力発電所事故で被災した市町村は土地を放棄するのではなく、除染して生活を再建するという世界的に見ても前例のない選択をしました。その結果、除染は住宅地・農地をはじめ学校や道路など人々の生活圏を優先して行われ、徐々に避難指示区域が縮小しています。このように復興に向けた取り組みが各地で進みつつありますが、2025年10月現在も福島県内外に約2.4万人が避難しています。

当館では上に述べたような福島が経験した東日本大震災について、被災前の地域の姿から被災直後、さらには現在に至るまでの復興の過程について幅広く展示しています。原子力災害の特徴として建物等が破壊されず、避難後もタイムカプセルのように内部が被災当時のままになっていることが挙げられます。このため、避難など災害に深く関係した物資料が非常に多く残されました。当館ではこうした物資料に加えて当時を振り返る証言資料などを収蔵・展示しています。会員館の皆さんにおかれましては今も災害が継続する一方で、復興へ向けて、目まぐるしく変わる被災地域の様子を見に来ていただければ幸いです。今後ともよろしくお願ひいたします。



津波で変形した消防車



津波漂着物

 Giving Shape to Ideas

DYNAVISION-LED
LED DOME SYSTEM

革新的なテクノロジーを結集した
新しいLED映像システムで
リアルな臨場感と美しい映像体験を

 コニカミノルタプラネタリウム 製品 検索

コニカミノルタプラネタリウム PLANETARIA YOKOHAMA

Panasonic
CONNECT



第60回 日立シビックセンター科学館 照沼 佑介

アスレチックと科学の体験の融合「ためしてハニカム」



令和3年に全面リニューアルした当館の新しいシンボル展示「ためしてハニカム」は高さ約7メートル、幅約20メートル、奥行き約5メートルの巨大ジャングルジム科学体験展示です。内部には数学や科学の原理を学ぶことができる展示物12点が点在し、ネットを使いながら上下に移動し体験することで、子どもたちの冒険心と好奇心を刺激します。 “からだ”と“あたま”をフルに使って、楽しみながら学ぶ新たな体験がそこにあります。

日立シビックセンター科学館公式HP
<https://www.civic.jp/science/>

予告
次回執筆者は、ふくしま森の科学体験センター 本多 淳嗣さんです。

リニューアル情報のご提供をお願いします

最近(近年)リニューアルした展示、コーナー等はありますか?

もし、リニューアル行いました!という館・園がございましたら、ぜひ全科協ニュースへ情報をご提供ください!

全科協ホームページ(<https://jcsm.jp>)の投稿フォームからご投稿いただけます。

また、併せて特別展等の情報もご提供お待ちしております。(次号は1月2月開催分になります)

こちらも同じく全科協ホームページの投稿フォームからご投稿いただけます。

皆様のご投稿お待ちしております。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
 筋野 美穂(多摩六都科学館学芸員)
 平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(特命参事))
 弘田 澄人(川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館)
 天文担当係長)
 丸山 啓志(千葉県立中央博物館研究員)
 望月 貴史(岩手県立博物館専門学芸員)
 関根 則幸(国立科学博物館学習支援部広報・連携課長)

全科協事務局

国立科学博物館
 学習支援部 広報・連携課
 (担当:登島・齊藤・清水)
 TEL 03-5814-9171
 info@jcsm.jp
 発行日 2025年11月1日
 発行 全国科学博物館協議会©
 〒110-8718
 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
 印刷 株式会社セイコー社